



校訓

郷土を愛し  
明るく素直で  
たくましく

文責：校長 川内康範

「USP、JUVENUS『女の時代』なのかな。」

突然、何だろうと思われるのではないだろうか。私は、下に載せた新聞記事を読みながらいろいろなることを考えました。

今さら言うまでもないことですが、今年の大島中は女子が14名、男子が4名ですから、女子がずいぶん多い学校です。学校では、女子も男子も一緒に活動することがほとんどです。女子だから、男子だから、と別々に考えることはあまりありません。(私が中学生の頃は、男子は技術科だけ、女子は家庭科だけでした。)しかし、将来大人になれば、女性の生き方、男性の生き方という現実に向き合うことがあります。

「ジェンダー」という言葉があります。調べてみると次のような解説がありました。

身体的特徴など生来の性別の違いではなく、社会的、文化的につくられた性差のこと。「男は仕事、女は家事育児」といった「男はこうあるべきだ」「女はこうあるべきだ」とする性別による役割分担も含まれます。

ジェンダー(社会的・文化的な性差)は私たちの頭に深く根付いていて、「そういうものなんだ」と固定的に捉えてしまいがちです。例にあげている「男は仕事、女は家事育児」という捉え方もその一つだと思います。(本当のところは、時代によって、人によってずいぶん違うのです。)性別による役割分担をそのまま受け入れるのは悩まなくていいので、楽な面もあります。しかし、役割分担を受け入れてしまえば、個性を出せず、時には無理を強いられ、自由さがなくなります。生きづらさが生じることもあります。

今では女性も外で働く時代になりました。その意味では、「男は仕事、女は家事育児」という時代ではなくなっています。「イクメン」(育児をする男性)という言葉が聞くことがありますが、役割分担が見直されているという例でもあり、もう一つの見方をすれば、まだそれくらい珍しいことなのかもしれません。各家庭を見たとき、「男は仕事、女は家事育児」のはっきりした役割分担をされている家庭はあるのでしょうか。おそらくそれぞれの家庭では役割分担について話し合われ、それぞれの実態に合った役割分担がなされているのだと思います。うちの場合、お互いが分かり合うまでには時間もかかりましたが、うちの役割分担がおのずとできました。どこの家庭もそういうものではないでしょうか。

「男女共同参画社会」という言葉があります。しかし、完全に共同参画かと言うと、現実はまだそこまで到達していないようです。記事にあるような「女性が働き続ける難しさ」は現代社会でもあるのではないのでしょうか。この「女性が働き続

ける難しさ」がなくなる社会になって初めて「男女共同参画社会」と言えるのだと思います。大島中の女子生徒たちが大人になった時はそんな社会になってほしいと思います。また、生徒たちには「難しさ」を解決できる対処能力を身につけてほしいと思います。

2017.12.3

**春秋**

「いま、どのくらい『女の時代』なのかな。」西武流通(後のセゾン)グループがこう問いかける広告を新聞に掲載してから37年たつ。言葉の横には打ち掛け姿で結婚式に臨む女性の写真。結婚や育児で仕事を辞めても再就職制度がありますよ、と訴える内容だった。

▼コピーを書いた糸井重里氏が用意した案は、実は「人材、嫁ぐ。」だった。女性を人材と認め、惜しむ姿勢で企業の先進性を表したつもりがトップの堤清二氏は怒った。社員は人間であり単なる「人材」ではない。結婚や出産も一緒に喜び、支えるべきだ。こうして女性が働き続ける難しさを描く名コピーが生まれた。

▼おととい、雑誌「日経ウーマン」が毎年選ぶ「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」の表彰式があった。15年かけて画期的な化粧品を開発した研究者。宇宙に漂つゴミの除去に挑む会社社長。地域に溶け込みお年寄りなどの予防医療に取り組む看護師。「女性の時代」だと感じる一方、保育所の不足などなお残る壁の数々を思う。

▼日本の労働力人口は男性3800万人、女性2900万人。その差は年々縮まる。受賞者の一人で国連事務次長・軍縮担当上級代表の中満泉氏は、後に続く女性たちに「野心を持って」と呼びかけた。そのためには日々の仕事で「主張する、媚びない、忸度しない」ことが大事だ、とも。女性に限らず、心にとめたい言葉だ。